

# 放射線看護の現場から

## ——現状と課題——

### Current situation and challenges on radiological nursing

浦田 秀子<sup>1</sup> 野戸 結花<sup>2</sup>

Hideko URATA

Yuka NOTO

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

2 弘前大学大学院保健学研究科

1 Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

2 Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

座長：浦田 秀子 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授  
野戸 結花 弘前大学大学院保健学研究科教授

シンポジスト：

浅田 裕美 京都大学医学部附属病院・がん放射線療法看護認定看護師  
折田真紀子 長崎大学原爆後障害医療研究所・大学院生  
浅井 望美 国立がん研究センター中央病院・IVR 看護研究会代表世話人  
山崎 仁美 大阪市立大学医学部附属病院・がん放射線療法看護認定看護師

第1日目の会長講演に引き続きシンポジウムが開催された。本シンポジウムでは「放射線看護の現場から—現状と課題—」をテーマとし、放射線看護を構成する専門領域を広く網羅して各専門領域の第一線でご活躍されている看護職者4名をお招きし、それぞれの看護実践の現状と課題についてご講演いただき、未来への展望について総合討論を行った。

はじめに、浅田裕美氏（京都大学医学部附属病院・がん放射線療法看護認定看護師）から「放射線治療看護の立場から」というテーマでご講演をいただいた。近年、放射線治療はますます高度化・専門分化し、外来への移行が加速的に進んでいる。治療成績の進歩に伴い患者や家族からの期待も高まっているのが現状である。放射線治療の現場では看護職のマパワーや教育の不足、頻回なスタッフローテーション等のため、患者や家族に関わる時間は制約を受け、専門的な看護支援ができにくい状況にあることが課題としてあげられた。これに対して、外来で放射線治療を受けられる患者を対象とした看護面談を取り入れ効果をあげていること、ご自身のがん放射線療法看護認定看護師としての役割と活動のご紹介、放射線治療に関心を持つ「仲間」を増やしていくことが必要とのご提案をいただいた。次の折田真紀子氏（長崎大学原爆後障害医療研究所・大学院生）は、2011年3月の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故により避難を強いられている住民の方々への健康支援活動を継続されている。今回、「放射線防護・被ばくケアの立場から」ということでご講演をいただいた。放射性物質の測定データをもとに放射線に関する健康相談を実施し、被災住民の方々の

放射線防護や放射線に関する不安の軽減を図る活動を行っている。また、避難指示区域の住民の帰還に向け、環境中の放射線量と併せ個人被ばく線量の測定を行い、より個人の生活に密着した被ばく線量評価に基づいた帰還支援活動についてご紹介をいただいた。続いて、浅井望美氏（国立がん研究センター中央病院・IVR 看護研究会代表世話人）から「放射線看護の現場から—IVR 看護の立場から—」というテーマでご講演をいただいた。IVR という非常に専門性の高い看護領域でありながらその専門性や役割は未だ未確立であり、インターベンションエキスパートナースの高度看護実践内容が集約されていないこと、資格取得後の継続教育の体制が整っていないこと、IVR 看護領域の研究が少ないこと、IVR 看護を専門的に学んだ看護職がジェネラリストに位置づけられ院内のスタッフローテーションの対象になっているなどの問題を抱えていることをご指摘いただいた。これに対して、継続教育体制の整備、資格取得者の適正な活用の推進とシステム構築の提案と同時に、看護界での IVR 看護の認知度を高めるための活動を積極的に行っていくことの重要性についてご提案をいただいた。最後に、山崎仁美氏（大阪市立大学医学部附属病院・がん放射線療法看護認定看護師）から「放射線検査看護の立場から」ということでご講演をいただいた。放射線検査を受ける患者の看護は、患者が検査を安全かつ安楽に受けられることを目的としている。検査場面において患者と接することができる時間は限られており、看護は短時間で多くの対応を余儀なくされる。リスクを回避するためには効率的で正確な問診の技術を要する。特に、検査中・終了後の造影剤アレルギーに関する観察と臨床看護判断、その後の患者指導は重要な位置づけにある。また、患者は慣れない検査や検査結果への不安を抱きながら来院していることも多く、短時間のうちに行われる検査の説明や準備に気持ちが追いついていない場合もある。患者の心理面へ配慮したケアの充実が今後の課題であることをご指摘いただいた。

シンポジストからご発表のあったそれぞれの放射線看護領域における現状と課題や、会場の参加者から寄せられた意見・質問にシンポジストが答える形で総合討論が行われ、活発な意見が交わされた。参加者の関心が高い話題として、造影剤を用いた検査におけるアレルギー反応への対応がある。参加者からは、検査を受ける方のアレルギー歴については事前に情報収集を試みているが正確に記載されていない場合も多いこと、時間が限られた検査前の面接のみでは詳細な把握が難しいこと、入院患者の検査であっても病棟看護師から正確な情報が得られにくいなどの問題点を感じているという発言があった。また、外来患者では特に、遅発性のアレルギー反応に関する患者指導と対応、急変時の対応をどのように行っているのかという質問が出された。これに対し、放射線検査における看護については病棟看護師の認識が高いとは言えず、検査に携わる看護師から積極的に情報を発信し、共有していく必要があること、病棟看護師が簡単に記載できるように事前の問診に関する申し送りリストを作成し活用していることが紹介された。遅発性のアレルギー反応については常にリスクを警戒し、初期症状を伝えて徴候があれば電話連絡をしてもらうよう指導を徹底していること、検査中の異常は軽症の場合でも正確に記録に残し、当直医師が対応できる体制を整備していること、検査中の急変時の初期対応で看護師の役割分担がうまくできない状況であったため、救急看護認定看護師にスタッフ教育の協力を依頼してスキルアップを図ったなどの工夫が紹介された。関連して、急変のリスクがあるにもかかわらず看護師配置が十分ではなく、「何かあった場合に看護師を呼んでもらう」という体制をとらざるを得ないことは非常に問題であり、看護職の人員の拡充を求めていく必要があるとの意見をいただいた。さらに、インターベンションエキスパートナースの資格取得をした看護師がジェネラリストに位置づけられ、ローテーションの対象になっているという指摘を受け、参加者からは、放射線診断分野の看護師として高い専門性を持っていることを様々な機会と方法でアピールしていくことを期待したいという意見をいただいた。最後に、現任教育に関する未来展望について各シンポジストからご発言をいただき、総合討論を締めくくった。